



アカデミー 「研修」の現場に行く!

栃木県
足利市

ミュージカル、オーケストラ、オペラという 3つのプロフェッショナル団体が 地域に根ざした文化芸術活動を展開

日本最古の総合大学・足利学校で知られる栃木県足利市。その「学びのこころ」を現代に引き継ごうと、文化振興に力を注いできた。なかでも注目されるのは、足利市民会館を拠点とする3つのプロフェッショナル芸術団体の存在だ。「足利ミュージカル」、「足利カンマーオーケスター」、そして「足利オペラ・リリカ」。いずれの団体も、市民会館での定期公演だけでなく、地域の公民館でのアウトリーチ公演、各学校での公演やワークショップなど、しっかり地域に根ざした活動を展開している。全国的にも珍しいこの取組みはどのようにして生まれ、どのような成果をもたらしてきたのだろうか。

●●●● ●●●●日本最古の総合大学・足利学校は ●●●●歴史と文化のまち足利の象徴

足利学校の創建は平安時代とも鎌倉時代とも言われるが、室町時代の永享11（1439）年、関東管領の上杉憲実が鎌倉・円覚寺から僧・快元を初代座主（校長）に招いて、運営に当たらせてことがわかっている。それ以降は室町～江戸期を通じて幕府の庇護のもとで隆盛を極め、「学徒三千人」とも言われた。日本にキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルは、「日本国中最も大にして、最も有名な大学」と、その存在を世界に紹介した。

明治維新とともに大学としての役割は終えたが、足利学校は今なお「歴史と文化のまち」足利の象徴であり、市民の誇りでもある。昭和41（1966）年に開館した足利市民会館も、市民の芸術・文化に対する熱い思いが力となり、市民の芸術・文化活動の拠点としてのみならず、北関東の文化の殿堂として誕生したものだ。

●●●● ●●●●芸術・文化の鑑賞機会の提供と ●●●●体験・創造機会の提供が使命

足利市民会館は開館以来、主に2つの使命を担っ

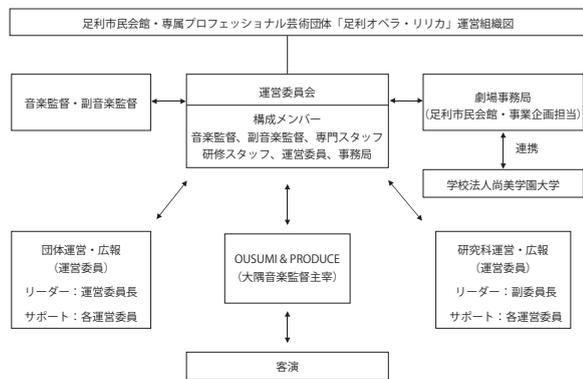
てきた。1つは「芸術・文化の鑑賞機会の提供」、もう1つは「芸術・文化の体験・創造機会の提供」である。そしていずれの点についても、一般市民向けと同時に児童・生徒を対象とする取組みを重視してきた。

前者の鑑賞機会の提供については、開館間もない昭和43年から会館の自主事業として、歌舞伎、オペラ、バレエ、オーケストラなどの公演を開催してきた。なかでもオーケストラについては、日本を代表するオーケストラの1つであるNHK交響楽団（N響）が3～4年に一度の割合で公演を行ってきた。N響が地方公演を行うようになったのは、この足利公演がきっかけだったとも言われる。

一方、児童・生徒向けには、やはり昭和43年から市内の小中高校生を対象として「芸術教室」を開催してきた。小学校では、まず高学年を対象とする演劇鑑賞がスタートし、昭和52年からは音楽鑑賞も始まった。さらに昭和58年から低学年向けの演劇鑑賞、昭和61年からは6年生向けに狂言の鑑賞も始まっている。

中学校では、昭和43年から演劇と狂言の鑑賞が始まり（狂言は昭和59年まで）、昭和49年からは音楽鑑賞も始まった。

高校では、市内9校のうち、足利女子高や足利高



チェリスト・宮田氏による小学校アウトリーチ

校で先行して始まり、次第に全校へ波及していった。音楽鑑賞は昭和43年から、演劇鑑賞は昭和58年から続いている。

これらのプログラムの鑑賞者総数は、初年度が小中高校合わせて延べ2万2,297人。その後は年々増加していき、最も多かった昭和62年には延べ4万7,236人を数えている。芸術教室は現在も続けられており、半世紀にも及ぶ歴史で鑑賞者の総合計は延べ164万4,027人（平成28年まで）に達する。

市では平成20年、芸術教室に関するアンケート調査を実施した。その結果、「これまでに何らかの形で芸術教室を鑑賞したことのある市民」の割合は60%にも及んだ。その内訳は、オーケストラを聴いたことのある市民が53.9%、演劇を観たことのある市民が55.2%、狂言を観たことのある市民が46.5%であった。

後者の体験・創造機会の提供については、市民ミュージカルや市民オペラの取組みが代表的な事例だ。市民ミュージカルは平成16（2004）年を皮切りに4回、市民オペラは平成21年から24年の間に2回、それぞれ行われた。また、学校での芸術教室に合わせて、子どもたちに演劇の楽しさを感じてもらえるよう「演劇ワークショップ」を開くこともあった。こうした活動が、後述する3つのプロ団体結成の下地になったことは間違いない。

●●●● 現代版・足利学校の創造へ ●●●● 市民会館活性化計画を策定

こうして積極的に芸術・文化の鑑賞機会と体験・創造機会の提供を図ってきた。足利市民会館は、平成18年度、開館40周年を機に「活性化計画」を策定した。公益財団法人足利市みどりと文化・スポーツ財団（MBS財団）が、市民会館の指定管理者となるに当たってまとめたものである。同計画の序文では、次のように位置づけを記している。

「（前略）昨今の激動する社会の中で、多様化する芸術・文化のあり方や市民ニーズに応えるべく、新たな足利市民会館の構築が必要になってきました。

そこで、『新・足利市民会館』を構築するため、永年培ってきた『芸術・文化』と貴重な地域資源である『足利学校』の『学び』とを融合させた『現代版・足利学校』の創造に向け、この活性化計画を策定し、将来を方向づける重要な計画として位置づけるものです。」

計画の基本方針としては、「芸術・文化との融合から生まれた5つの生きがいの『学び』発信」を掲げる。5つの生きがいとは、「共感」「創造」「表現」「情熱」「伝承」である。また目標としては、音楽、演劇、日本伝統芸能という3つの分野で、前述した5つの生きがいの「学び」を実践することをうたっている。

そのうえで、具体的な施策として上記の3分野ごとに次のような事業を掲げている。

1. 音楽を通しての「学び」
 - ①（仮称）足利ユース・オーケストラの発足
 - ②（仮称）足利・学び舎音楽祭の開催
2. 演劇を通しての「学び」
 - ①足利オリジナル・ミュージカルの開催
3. 日本伝統芸能を通しての「学び」
 - ①青少年への和楽器&郷土伝統芸能の伝承
 - ②足利「大田楽」の開催

この活性化計画は平成19～21年度の3か年計画で、上記の各事業について年度ごとの具体的な目標も示されている。また、計画推進の手法として企画・制作段階からの市民参画、市民主役の運営を強調している点が特筆される。

●●●● 和楽器&郷土伝統芸能の ●●●● フェスティバルを毎年開催

活性化計画で掲げられた各事業の達成状況は、次



小学校演劇ワークショップ

この4つのプロジェクトのうち、①③④は活性化計画の取組みを継続あるいは発展させたもの。これに対して②は、ACAPによって新しく提案されたアイデアだ。前述のように、これまでも市民ミュージカル、市民オペラなどが上演され、鑑賞するだけでなく自ら芸術・文化を体験・創造する試みがなされてきた。しかしこれらはスクラップ&ビルド方式で、1回ごとにメンバーを募ってチームをつくり、一から作品を構築していた。この方法は非常にエネルギーを必要とする。芸術・文化による地域活性化という使命を継続的に果たしていくためには、実演団体を立ち上げる方が効果的という判断であった。

特にミュージカルについては、平成16年以来4度にわたる市民ミュージカルの蓄積があり、延べ4,675名もの市民が参画・鑑賞してきた。今後の活動のあり方についても、そうした市民が実行委員会を組織して協議・検討を重ねた。そうして得た結論が、市民によるプロ劇団の立ち上げだったのだ。

●●● ●●●**学びの視点を重視し** ●●●**プロ養成機関「研究科」を開校**

立ち上げに際しては3団体とも、単に既存のアーティストを集めてチームを結成するのではなく、まずプロ養成機関「研究科」を開校したのが特徴的だ。「学び」の視点を重視した、足利市民会館らしい手法と言える。ミュージカルについては、平成23年10月に研究科を開設し、25年3月まで1年6か月をかけてミュージカルを演じるために必要な知識や技術をじっくり教え込んだ。オーケストラとオペラについては、平成24年6月に研究科を開設し、翌25年3月まで9か月間のカリキュラムでプロの卵を育成した。

研究科の授業は基本的に毎週1回。ミュージカルについては、前出の小嶋希恵さんが中心となって講師役を務めたほか、ダンス、歌などそれぞれの分野の



足利オペラ・リリカ「蝶々夫人」

専門家が教鞭を取った。講師陣の約8割が宝塚出身という豪華な顔ぶれだ。オーケストラについては元群馬交響楽団コンサートマスターの風岡優さんら、オペラについては音楽監督の大隅智佳子さんらが講師となってレッスンをを行った。

目指すのはあくまでプロフェッショナルの芸術団体であり、アマチュアによる愛好会ではない。したがって、研究科の生徒に対しても求めるレベルは高く、レッスンは厳しかった。ミュージカルの場合、最初に入學した30人ほどの生徒のうち、最後まで残ったのはたった6人だった。

こうして研究科の養成プログラムを終え、オーディションによってメンバーを選出。平成25年5月、足利市民会館・専属プロフェッショナル芸術団体として、「足利ミュージカル」、「足利カンマーオーケスター」、「足利オペラ・リリカ」の3団体がそろって設立された。

次からは、これら3つのプロ団体について個別に紹介していこう。

●●● ●●●**キッズコースもスタートし** ●●●**研究科は定員を大幅に上回る応募**

まず、「足利ミュージカル」。研究科の生徒で最後まで残った6人は、正式に団員となった。平成25年9月に行われた旗揚げ公演の演目は、「銀河鉄道之夜」。宮沢賢治の名作を、足利ミュージカル芸術監督の小嶋さんがミュージカル化したものだ。

その後も、「竹取物語」、「里見八犬伝」、さらには夏目漱石の「吾輩は猫である」など、長く読み継がれている物語文学を題材にした作品が目立つ。それは、足利ミュージカルとして次のようなコンセプトを掲げているためだ。「優れた日本文学を、読み聞かせの視点を入れつつミュージカルならではのエンターテインメント性を加えて、作品の素晴らしさをわかりやすく楽しく、そして身近に子どもたちや親子に伝える」。



足利オペラ・リリカ研究科修了演奏会

年に1回の定期公演では、元タカラジェンヌなどの華々しい経歴と確かな実力を持つ俳優が客演として加わる。これも、日本一の宝塚音楽学校合格者数を誇るKIEミュージカルスクールの代表でもある小嶋さんの力によるところが大きい。同時に、足利ミュージカルがプロのミュージカル俳優からもきちんと認められている証とも言えるだろう。

また、市民参加型ミュージカルをうたっているのも、足利ミュージカルらしい特徴の1つ。平成26年12月の定期公演「妖精パック」、27年11月のラテンミュージカル「ソラリス」などは、一般市民からアンサンブル・エキストラを募集し、団員らと一緒に舞台をつくり上げている。

足利ミュージカルでは、毎年研究生を募集するとともに、研究科の卒業生などを対象に団員、準団員のオーディションを行っている。団員・準団員になると、公演ごとに報酬が支払われる。現在、団員は6名（うち発足当初からの団員が2名）、準団員が10名、研究生が44名という構成だ。

昨年度からは、研究科に小学1～4年生を対象とするキッズコースがスタートした。ジュニアミュージカル劇団の発足は、小嶋さんの長年の夢でもある。その実現に向けて第一歩を踏み出したことになる。キッズコースとの相乗効果もあってか、研究科は昨年度、今年度と定員を大幅に上回る応募があったそうだ。

現在の活動は、年1回の定期公演のほか、公民館などに出向いてのアウトリーチ公演、夏休みに市民会館小ホールで催す親子ふれあい劇場、応募のあった小学校に出向いてダンスや歌を指導する小学校演劇ワークショップなど。近年は市内外からの依頼に応じての公演など、活動の幅も広がって来ている。

足利市民会館事業企画担当係長の小林邦彦さん（MBS財団所属）は、発足当初から昨年度まで足利ミュージカルを担当しており、劇団の成長とその活動



足利カンマー第12回定期演奏会

が市民に及ぼした効果を間近で感じてきた。「タカラジェンヌに憧れて研究科のレッスンを受けに来る若者や子どもたちも多く、演劇の好きな子どもは確実に増えていると実感しています。地元出身で研究生から団員になった人たちの活躍がいい刺激となっているようです。子どもと保護者の方が一緒に夢に向かって頑張っている姿を見ると、こちらも嬉しくなります。」

●●● ●●●年3回の定期公演のほか ●●●福祉施設での出前演奏会も開催

次にオーケストラの「足利カンマーオーケスター」。平成24年6月に開設された研究科には、思っていたほどの応募がなく、団員のオーディションは研究科卒業生以外からも公募するとともに、足りないパートについては実力のある演奏者を風岡さんの推薦枠で団員登録するなどの苦労もあった。カンマーオーケスターはドイツ語で「小編成のオーケストラ=室内管弦楽団」を意味する。その言葉どおり、オーケストラとしては最小単位となる35人編成でスタートした。研究科については、発足とともに閉じることとした。

音楽監督には、前出の風岡優さんを迎えている。平成25年7月の発足披露演奏会では、ビゼーの「交響曲ハ長調」、ドヴォルザークの「チェコ組曲」などを演奏した。

オーケストラについては、前述のように足利ユースオーケストラが先に誕生しており、その運営スタッフとして活動していた市民やユースオーケストラのメンバーの保護者らが、カンマーオーケスターの運営も中心的に支えることとなった。また、ユースオーケストラ出身でカンマーオーケスターの団員やステージマネージャーとなった人もいる。

現在の団員は54名で、そのうち足利市在住者は2人ほどという。それ以外は全国各地に散らばっており、音楽教室を開いたり他のオーケストラとかけもちして



足利ミュージカル学校公演



足利ミュージカル第4回定期公演

いる人も少なくない。常任の指揮者は設けず、演奏会ごとに外部から招へいする形だ。また定期演奏会では、外部から新進あるいは実力派の演奏者を招くこともある。

定期演奏会は、当初は年2回であったが、平成27年度からは年3回開いている。このほか、市民交流コンサートや小学校・福祉施設での出前コンサートも毎年何度か開催するなど、一貫して地域に密着した演奏活動を展開している。基本コンセプトは、ずばり「いい演奏をすること」と単純明快。足利市民に愛され、市民が誇りとすることのできる楽団を目指している。

●●●● ●●●●**足利カンマーオーケスターと** ●●●●**足利オペラ・リリカの競演も実現**

最後に「足利オペラ・リリカ」。足利市民会館ではオペラについても、開館以来平成24年度までの45年間で18回の公演を行ってきた。人口15万人弱の地方都市としては、かなりの割合である。特に21～24年度の4年間では、2回の市民オペラ（「ラ・ボエーム」「夕鶴」と1回の一般鑑賞公演を催した。これに先立つ19・20年度には、前出の直井研二さんによるオペラ・セミナーも開講された。こうした機会を通じて盛り上がりつつあった市民のオペラへの関心を持続的なものにしようと、市民に直結したプロフェッショナル・オペラ制作・実演団体の設立が図られた。

平成24年6月に研究科を開設し、その1期生は翌25年3月に卒業。団員の選抜は、オーディションではなく音楽監督の大隅智佳子さんに一任された。5月の発足を経て、11月の発足記念公演ではプッチーニ作曲の歌劇「蝶々夫人」が上演された。

以後、年1回の定期公演のほか、公民館でのアウトリーチ公演、小劇場での公演、学校での公演、市内中学校音楽部の合唱指導など、精力的に活動して

いる。定期公演に際しては、公募市民による「足利市民オペラ合唱団」を結成してプロと共演するという、“市民発の劇団”ならではの仕掛けもなされる。また平成28年11月の第3回定期公演（モーツァルトの歌劇「フィガロの結婚」では）、足利カンマーオーケスターが演奏して足利オペラ・リリカが歌い演じるという、専属プロ2団体の競演も実現している。

研究科は現在も継続しており、定員5名という狭き門に音楽大学の卒業生などが挑んでいる。登録団員は24名で、この中から公演ごとにキャストが選ばれる。音楽監督の大隅さんはプレイングマネージャーという位置づけで、「蝶々夫人」における蝶々さん、「椿姫」におけるヴィオレッタなど重要な役どころを演じている。地域に出向いてのコンサートや合唱指導などには、研究生も実践的な勉強を兼ねて参加する。

●●●● ●●●●**足利ミュージカルの発足後** ●●●●**年平均公演回数は25倍に増加**

これら専属3団体の発足から5年が経過した。その活動がもたらした足利市における芸術環境の変化は、数字を見ても明らかだ。

ミュージカルについては、「足利ミュージカル」発足前（ミュージカル公演初年の昭和49年から平成20年までの34年間）と、発足後（平成25～29年の5年間）を比べると、年平均の公演回数は0.82回から21.2回へと25倍もの大幅増加を見せている。年平均の入場者数も、820.03人から5,562.6人へと7倍近くに増えている。

オーケストラについては、「足利カンマーオーケスター」発足前（オーケストラ初演の昭和43年から平成24年までの44年間）と発足後（平成25～29年の5年間）を比べると、年平均公演回数は3.2回から8.6回へと2倍以上の伸びを示す。ただ年平均入場者数については、4,052.8人から3,677.4人へと少し減少した。

